

「老年看護学実習」における学びの分析

— 学生の実習レポートの分析より —

杉野 朋子, 丹羽さよ子

要旨 本研究の目的は、「老年看護学実習Ⅰ」を終えた時点で、“老年者の立場に立ったケアとは”ということをもが学生がどのように捉えているのかを分析し、講義・実習を通しての学びについて明らかにすることである。老年看護学実習Ⅰを履修し、同意の得られた学生71名の提出したレポートを対象に、“老年者の立場に立ったケアとは”の記述内容から、ケアに関する記述を抽出し、実習場（介護老人保健施設、グループホーム）ごとに、意味の類似性によりグルーピング化を行い、カテゴリーを抽出した。その結果、両施設で【その人らしさを理解する】、【自立を目指した関わり】、【老年者を尊重する】、【ケアをするために必要な基礎知識を持つ】が、介護老人保健施設群のみで【家族支援】、【環境の充実】が抽出された。また、全153コードのうち、【その人らしさを理解する】のコード数が54.2%と半数以上を占めていた。以上のことより、学生は、老年看護に必要な要素を学ぶことができたのではないかと考える。

キーワード： 老年看護学実習, レポート分析, 実習効果

Ⅰ. はじめに

平成21年に我が国の高齢化率は22.1%を迎え、増加の一途をたどっている¹⁾。また、高齢者のいる世帯が4割になり、その中でも独居、高齢者夫婦世帯が半数を占めている¹⁾。この様な状況の中、何らかの疾患や障害により入院を余儀なくされた老年者は、容易に生活障害が生じやすく、退院の時期が来ても自宅復帰のための環境が整わないなどの理由から、施設での生活を送り続けていることも多い。このように、老年看護の提供の場は、病院などの医療機関にとどまらず、介護老人保健施設、福祉施設、在宅とその範囲は広く、どこで生活を送っていてもその人らしい生活が送れるような環境づくりが大きな課題である。

最期までその人らしい生活が送れるよう支援するためには、老年者の目線に立つことが重要であり、「対象理解」が必要不可欠となる。しかし、近年、家族形態も核家族化が進み、平成20年には3世代世帯が18.5%とな

り¹⁾、学生は老年者と接する機会が少なく、老年者がどのような生活をしているのか、どのような思いで暮らしているのかについてほとんど知らず、また、どのように関わったらよいのかもわからない状況にあると思われる。

看護基礎教育の指定規則では、「老年看護学」として講義4単位、臨床実習4単位が義務付けられている。本学では、「老年看護学」について二年次より四年次までに講義4単位（30時間×4）と臨地実習4単位（45時間×4）を行い、講義、臨地実習を通して老年者についての理解を深め、老年看護を實踐できる基本的な能力の習得を図っている。

本学の老年看護学実習は、「老年看護学実習Ⅰ」と「老年看護学実習Ⅱ」があり、「老年看護学実習Ⅱ」に先立って行われる「老年看護学実習Ⅰ」では、「老年期にある対象をホリスティック（全人的）に理解する」ことを目標とし、日常の生活援助とコミュニケーションを中心とした実習を介護老人保健施設（老健）あるいはグルー

プホームの入所者を対象として行っている。そして、実習終了後“老年者の立場に立った看護とは”という自由記述によるレポートを課している。

そこで、本研究では、今後の老年看護学の基礎教育に資するために、学生のレポートを分析することにより、「老年看護学実習Ⅰ」を終えた時点で“老年者の立場に立ったケアとは”ということを学生がどのように捉えているのかを明らかにし、講義・実習を通しての学びについて検討する。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

1) 看護学専攻の三年生のうち、老年看護学実習Ⅰを履修した学生77名のうち、研究協力の同意が得られた71名
2) 老年看護学に関する学習背景

講義としては、老年健康論、老年看護学概論、老年ケア論、リハビリテーション看護の4科目である。その主な講義内容は表1に示す通りである。

表1 老年看護における主な講義内容

「老年健康論」2年生前期
・老年期の発達課題
・老年者の身体的、心理的、社会的特徴について
・老年者のQOLについて
・老年者を取り巻く問題
・老年者のケアシステム
「老年看護学概論」2年生後期
・老年看護とは
・老年看護展開において目指すべきこと
・老年期に起こりやすい日常生活の問題について
「老年ケア論」3年生前期
・老年看護に必要な不可欠な臨床的な知識・技術について
「リハビリテーション看護」3年生前期
・リハビリテーションでの看護の役割
・リハビリテーション看護に必要な知識・技術

3) 「老年看護学実習Ⅰ」の展開方法

3年次の10月～2月までの期間に、老健かグループホームのいずれかで8日間の実習を行う。学生の実習対象となる老年者は脳卒中後遺症等の疾患や加齢による何らかのADL障害や認知障害をもつ人である。

学生には、以下の①～⑥を実習目標とするように指導している。

- ① 老年期の生理的、心理・社会的な特性を考慮しながら対象を理解できる。
- ② 対象がどのような生活をしてきたのか、今どのような環境の中で生活しているのか、どのような心情なのかを理解できる。
- ③ 対象の特性に合わせた日常生活の援助法を実施できる。

④ 家族との関係や家族の心情を把握し、対象及び家族への支援を実施できる。

⑤ 他職種との協働のなかでの看護の果たすべき役割とチームケアのあり方を理解できる。

⑥ 老年者への看護・介護の現状を把握し、今後の老年者へのケアのあり方について考えることができる。

また、実習終了日には学生全員で企画したレクリエーションを老健で実施している。カンファレンスでは学生それぞれに実習で体験し特に印象に残った場面を具体的に挙げてもらい、その意味づけを学生全員と教員とで行うことで、老年者や老年看護についての学びを深めるようにしている。

2. 方法

1) 調査期間

平成21年10月5日～平成22年2月18日

2) 調査内容

実習終了後に提出される、“老年者の立場に立ったケアとは”という問いに対するレポートの記述内容

3. 分析方法

対象を老健で実習を行った群(老健群)43名とグループホームで実習を行った群(グループホーム群)28名に分けて分析した。記述内容より、ケアに関する記述を抽出しコード化した。抽出されたコードを意味の類似性によりグルーピングし、サブカテゴリーとした。さらに、サブカテゴリーを意味の類似性により統合し、カテゴリーを抽出した。

4. 倫理的配慮

研究目的・内容、自由意思での参加であり、不参加による不利益は一切ないこと、個人が特定されないようにすることを説明し、同意を得て行った。また、本研究は成績評価提出後に分析したものであり、成績評価には無関係であることも説明した。

Ⅲ. 結果

実習終了時に提出された最終レポートの「“老年者の立場に立ったケア”とは」の記述内容から、ケアに関する記述を抽出し、それぞれの施設ごとに分けて分類を行った。その結果、全体で153コードが抽出され、老健群90コード、グループホーム群63コードであった。また、これらのコードを意味の類似性によりカテゴリー化した結果、老健群では6つの、グループホーム群では4つのカテゴリーに分類された。

表2 老年者の立場に立ったケアとはの記述内容の分類（老健群）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数	サブカテゴリーコード数	カテゴリーコード数
その人らしさを理解する	言動の背景にある思いを推測する	その行動の背景・思いを考える	10	22	46
		思いを知り、それに沿ったケア	5		
		自分がされるとどう感じるか考えて接する	2		
その人の価値観や人物像を知る	その人の価値観や人物像を知る	良く話を聞く	2	22	46
		その人の世界に沿って一貫した関わり	1		
		同じ目線で関わる	1		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	気持ちに寄り添い、心理的安寧を図る	1	2	16
		これまでの生活を考慮した関わり	7		
		対象一人一人の特徴を知る	6		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	ニーズに応える	2	2	16
		大切にしていることを尊重して関わる	1		
		個性を生かしたケア	1		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	意思を尊重する	1	2	16
		心と体の面からその人らしさを捉える	1		
		価値観を尊重する	1		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	信念を尊重して関わる	1	2	16
		訴えに迅速に対応する	1		
		相手に合わせたコミュニケーションを工夫する	1		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	介護する側の気持ちも相手に表出する	1	2	16
		尊厳を尊重する	4		
		自尊心を尊重する	3		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	一人の人として接する	3	18	18
		敬意を持つ	2		
		気遣いを忘れない	2		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	尊敬の気持ちを忘れない	1	18	18
		失礼のない態度・言葉遣いをする	1		
		人生の先輩として接する	1		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	羞恥心に配慮する	1	18	18
		対象ができる場所はしてもらい、出来ないところを援助する	9		
		高齢者のペースに合わせたケア	2		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	これまでの生活に近づくような援助をする	1	12	16
		対象の役割を理解する	1		
		自己を尊重できるような環境づくり	1		
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	自信につながるようなケア	1	4	16
		社会参加を促す	1		
		ケアするために必要な基礎知識を持つ	2		
ケアするために必要な基礎知識を持つ	ケアするために必要な基礎知識を持つ	対象のADLを理解する	2	5	5
		老年期における症状等を考慮する	1		
		対象だけでなく、家族も含めた援助	1		
家族支援	家族への支援	対象だけでなく、家族も含めた援助	4	4	4
環境の充実	環境の充実を図る	十分な設備、スタッフ、時間が必要	1	1	1

1. 老健群の記述内容について（表2）

老健群の記述内容からは90コードは6つのカテゴリーに分類された。最もコード数の多かったカテゴリーは【その人らしさを理解する】46コードであった。その他のカテゴリーは【老年者を尊重する】18コード、【自立を目指した関わり】16コード、【ケアするために必要な基礎知識を持つ】5コード、【家族支援】4コード、【環境】1コードであった。

また、【その人らしさを理解する】のカテゴリーは〈言動の背景にある思いを考える〉22コード、〈その人の価値観や人物像を知る〉22コード、〈対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫〉2コードの3つのサブカテゴリーで構成された。【老年者を尊重する】は、〈人

間として先輩としての尊敬の念を持つ〉18コードのサブカテゴリーで構成された。【自立を目指した関わり】は、〈持てる力を発揮できるような関わり〉12コード、〈意欲を持てるような関わり〉4コードの2つのサブカテゴリー構成された。【ケアするために必要な前提知識を持つ】は、〈老年期の身体的特徴を知っておく〉5コード、【家族支援】は〈家族への支援〉4コード、【環境の充実】は、〈環境の充実を図る〉1コードのそれぞれ1つのサブカテゴリーで構成された。

2. グループホーム群の記述内容について（表3）

グループホーム群の記述内容からは63コードが抽出され、4つのカテゴリーに分類された。最もコード数の多

表3 老年者の立場に立ったケアとはの記述内容の分類(グループホーム群)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数	サブカテゴリーコード数	カテゴリーコード数
その人らしさを理解する	その人の価値観や人物像を知る	一人一人の価値観や人物像を理解し、それをふまえたケアを行う	4	15	43
		豊富な人生経験が背景となり今があり、画一的なものではなく、個性をふまえたケア	3		
		生活背景を基にその生活に近づけるようなケア	3		
		一人一人のこだわりを理解し、話に耳を傾け、対象自身に寄り添ったケア	2		
		その人に興味・関心を持ち、その人をよく知った上で関わる	1		
		これまでの人生を肯定し、若いや死を受け入れ、その後の人生をその人らしく過ごせるようにする	1		
	対象とその家族の気持ちをふまえたケア	1			
	言動の背景にある思いを推測する	心を寄せて理解したいという姿勢	5	13	
		対象の言葉の裏側にある思いに目を向ける	4		
相手の立場であったらと想像し、気持ちを置き換えて考える		3			
対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫	家族と離れる寂しさ、家族を思う優しさを理解する	1	9		
	その人らしさを尊重し、理解してもらるように分かりやすく伝える	5			
	不安を抱く方に、話を聞き、安心できるような声かけ、ボディタッチなどの不安を軽減させる関わり	4			
	認知症で「知らない人」と捉えてしまう場合、毎日会うたびに自己紹介をする	1			
自立を促す関わり	対象のもつ能力を十分に発揮できるような関わり	何もかも援助するのではなく、出来ることはしてもら	3	8	12
		高齢者のペースに合わせる	3		
	意欲を持てるような関わり	対象に残っている能力や知識を十分に発揮できる機会を作る	2	4	
		生活の中で生きがいをもっていけるようにする	2		
老年者を尊重する	人間として先輩として尊敬の気持ちを持つ	対象が自発的に意欲的に行動するように支援する	1	8	8
		老年者の意見を取り入れながら、機能回復に役立てるような支援をしていく	1		
		認知症であっても、子供扱いせず、自尊心を損なわせないようなケアをする	3		
		人間らしい関わり、異性に対する関わり	1		
		羞恥心への配慮	1		
		人生の先輩であるということを忘れずに声かけや態度をきちんとする	1		
長い人生を歩んでこられたという尊敬の念を込めた関わり	1				
ケアするために必要な基礎知識を持つ	老年期の身体的特徴を知っておく	これまで培ってきた価値観や信念を考え、人生の先輩としての尊敬の念を持ってケアする	1	6	6
		高齢者の特徴と認知症の症状をきちんと理解する	3		
		転倒などの危険を早期発見し安全に生活できるようにする	2		
		身体的特徴を理解し、予測したケア	1		

かったカテゴリーは【その人らしさを理解する】43コードであった。その他のカテゴリーは【自立を目指して関わる】12コード、【老年者を尊重する】8コード、【ケアをするために必要な基礎知識を持つ】6コードであった。

また、【その人らしさを理解する】のカテゴリーは、〈その人の価値観や人物像を知る〉15コード、〈言動の背景にある思いを考える〉13コード、〈対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫〉2コードの3つのサブカテゴリーで構成された。【自立を目指した関わり】は〈対象の持つ能力を十分に発揮できるような関わり〉8コード、〈意欲を持てるような関わり〉4コードの2つのサブカテゴリーで構成された。【老年者を尊重する】は、〈人間として先輩としての尊敬の念を持つ〉8コードのサブカテゴリーで構成された。

3. 全記述内容の割合について

老健群、グループホーム群から抽出されたコード数は全部で153コードであった。また、老健群とグループホーム群別に記述内容を分析した結果、両施設で共通して抽出されたカテゴリーが4つ、老健群のみで抽出されたカテゴリーが2つであった。

そこで、両施設に共通して抽出されたカテゴリーのコード数の割合を見てみると、【その人らしさを理解する】83コード(全コードに占める割合54.2%、以下同様)、【自立を目指した関わり】28コード(18.3%)、【老年者を尊重する】26コード(17.0%)、【ケアをするために必要な基礎知識を持つ】11コード(7.2%)、【家族への支援】4コード(2.6%)、【環境の充実】1コード(0.6%)であった。

IV. 考察

老年看護学実習Ⅰ終了後に記載された、“老年者の立場に立ったケアとは”の記述内容の分析を行った結果、両施設で抽出された【その人らしさを理解する】、【自立を目指した関わり】、【老年者を尊重する】、【ケアをするために必要な基礎知識を持つ】と老健群のみで抽出された【家族支援】、【環境の充実】のカテゴリーに分類された。

コード数の最も多かった、【その人らしさを理解する】のカテゴリーは、その人の価値観や人物像を知り、それを尊重して関わる、また、自分たちから見ると問題行動と捉えられてしまいがちな言動であっても、その背景に

はその人なりの思いが存在していること、さらに、そのような背景を知りえるためには、相手に合わせて話し方や言葉の選択などをする必要があることなどが記述されていた。高齢者はこれまで生きてきた背景にある価値観、社会文化的背景により、ライフスタイルや行動パターンに大きな個人差があり、この差を念頭において、高齢者自身がその人らしさを発揮して自立して生活できているか、その人らしくより質の高い生活を営んでいくためにはどのような援助が必要なのかを理解することが重要である²⁾といわれている。そのため、老年者の立場に立つためには、何よりもまず、その人を知ることが大切であるとの思いから、このカテゴリーのコード数が最も多くなったのではないかと考えられる。〈言動の背景にある思いを考える〉は、認知症高齢者との関わりの中から、自分たちからみると問題行動として捉えられてしまう行動も、不安であったり、何か用事があったりと、そこにはその人なりの理由があって行われていることを実感していた。また、〈その人らしさ、個別性の理解〉では、対象の言動の背景を知るためには、これまでの生活背景や、これまでに築き上げられてきた価値観やその人の大切にしている思いなどを知ることが必要であると実感していた。さらに、その人らしさを理解することもだが、まずは、看護師として、対象の思いを引き出す技術、つまり〈対象に合わせたコミュニケーション方法の工夫〉の重要性も理解できていた。

【自立を目指した関わり】のカテゴリーは、ADLを十分に把握した上で、対象の持つ能力が最大限に発揮できるように、また、自信につなげられるようなケアが必要であると記述されていた。これは、「人は生涯を通して発達し続ける」という生涯発達を基本にしている老年看護学の考え³⁾を学生が理解できたのではないかと考えられる。〈対象のもつ能力を十分に発揮できるような関わり〉は、つい手を貸してしまい、過介助になってしまうことが、廃用症候群につながる恐れがあり、できるところ、出来ないところをきちんと見極め、必要最小限の援助をしていくことが、老年者にとっても、重要であると感じていた。また、何も出来なくなってしまうことにより自信喪失につながる恐れがあることから、〈意欲を持てるような関わり〉をすることで、生きがいを見つけ、自己尊重できるような関わりが重要であると感じていた。

【老年者を尊重する】のカテゴリーは、人生の大先輩と接する際に自分たちがどうあるべきかということについて記述がされていた。老年者は自分たちの何倍も生きてきた大先輩であり、ケアする際には、自尊心を損なわないよう、言葉遣いや、羞恥心への配慮なども怠らないなどのケアする際にあるべき態度について記述されてい

た。また、そのような態度の背景には先輩としての尊敬の念を持つことを忘れてはならないと記述していた。

【ケアするために必要な基礎知識を持つ】では、看護者として老年期に起こりやすい身体的な特徴や、認知症などの理解といった、基礎となる一般的な知識を備えておく必要性が記述されていた。判断基準ともなる基礎知識を備えておくことの重要性が理解できていた。

【家族支援】、【環境の充実】のカテゴリーは、老健群から抽出されたカテゴリーである。老健群からのみ抽出された背景として、老健とグループホームの環境や入所目的の違いが考えられる。老健は在宅復帰を目的としており、また、在宅介護では介護者の多くが家族である。そのため、家族の介護力を把握し、対象の目指すゴールを家族と共に考えていく必要がある。しかし、記述数としては他のカテゴリーと比較すると少ない。これは、実習中に実際に入所者の家族と接する機会が少なかつたり、入所者がもともと独居であつたりすることで、家族と老年者を結び付けて考える機会が少なかった可能性がある。また、老年者の立場に立ったということで、老年者本人のこのことのみ記述に集中した可能性もある。

【環境の充実】に関しては、十分な設備、スタッフ、時間が必要であると記述されていた。看護・介護職員の人員配置数は3対1と、両施設間に変わりはない。しかし、実際の現場はゆっくり話をする時間もないほど、日常生活援助などで追われている。それをみて、より多くの時間やスタッフ、施設の充実が必要であるという記述がされたのではないかと考える。

以上、学生は【その人らしさを理解する】、【自立を目指した関わり】、【老年者を尊重する】、【ケアするために必要な基礎知識を持つ】ことの大切さを実感できていた。これは、老年看護に必要な要素である、老年者自身が、自分自身であり続け、一貫した自己を創造できること、また、それに意味を見出すことができるようなケア⁴⁾を学ぶことができたものとする。人は経験世界での実践を通して、実践としてすでに知っていることを、あらためて「わかる」のであり、「なっとくする」のである⁵⁾。また、曖昧で不明瞭な経験を知性的な経験へと変容する経験の再構築の方法である「反省的思考」や「探究」を教育に用いる意義として、反省的思考の過程を通じてさまざまな意味が使用、洗練され、探求者のもつ意味体系がより拡充され、豊かになることにあるとされている⁶⁾。つまり、老年者の立場に立ったケアについて、講義で学び、知っているあるいは覚えている段階の知識や技術を、臨床実習での実体験によって意味づけし、「わかる」あるいは「なっとくする」知識や技術とすることができたものといえる。

このように、学生自身が、臨地実習を通して自己の経

験の持つ意味を試行錯誤することにより、学生の学びが拡大される。よって、学生の経験を言語化し、それに対する意味づけが大切であり、学生の経験への意味づけを豊富にしたり、それを広げていくための準拠枠を広げていけるような講義、臨地実習のあり方を今後も検討していく必要がある。

V. 結 論

今回のレポート分析の結果、学生は実習を通して、“老年者の立場に立ったケア”には、【その人らしさを理解する】、【自立を目指した関わり】、【老年者を尊重する】、【ケアをするために必要な基礎知識を持つ】が大切であることを理解できていた。

文 献

- 1) 厚生労働省：平成22年版 高齢社会白書，
http://www8.cao.go.jp/kourci/whitepaper/w-2010/zenbun/22pdf_index.html
- 2) 奥野茂代，他編：老年看護学—概論と看護の実践，
第4版，ヌーヴェルヒロカワ，東京，2010，163
- 3) 北川公子，他編：老年看護学，系統看護学講座専門
分野Ⅱ，第7版，医学書院，東京，2010，11
- 4) 野口美和子：老人看護学再考—自我発達の観点から，
Quality Nursing, 1997 ; 3(10) : 4-9
- 5) 佐伯胖：「わかる」ということの意味[新版]，岩波
書店，東京，1995，188
- 6) 早川操：デューイの探求教育哲学—相互成長を目指す
人間形成論再考，名古屋大学出版会，名古屋，
1994，2-3

Learning in “Gerontological nursing practice”

— Analyzing students’ practice reports —

Tomoko Sugino, Niwa Sayoko

Department of Gerontological Nursing, School of Nursing,
Faculty of Medicine, Kagoshima University,
8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan

Abstract

This study aimed to analyze how students who had studied “Gerontological Nursing Practice I” perceived “the kind of care desired by elderly people”, so as to clarify what they had learned from lectures and practices. Upon receiving the consent of 71 students who had studied “Gerontological Nursing Practice I”, we extracted accounts of “the kind of care desired by elderly people” in their reports, grouped them according to their semantic similarities under each place of practice (long-term care health facilities and group homes), and extracted categories. As the results, we extracted four categories ([understanding personal traits], [forming a relationship toward self-reliance], [respecting elderly people], and [having the fundamental knowledge for providing care]) for both places and two other categories ([family support] and [improving the environment]) in long-term care health facilities. With regard to the rate of codes under all categories, the codes under [understanding personal traits] totaled 54.2%, comprising more than half of all codes.

Key words: gerontological nursing practice, analysis of reports, effectiveness of practice